磐城水産新報

毎月十、廿、卅日發行
定價 一部 十錢 一ヶ年 三圓
廣告料 十二字詰一行五十錢
發行兼編輯印刷人 伊藤隆次
福島縣小名濱町
發行所 磐城水産新報社

二百十日及二百二十日に就て

観天望氣師

△ △ △

暦本に二百十日及二百二十日と言ふがあつて、世人一般は勿論農家は殊に其の時季が稲の開花期であるが、故に此の兩日を厄日なりと稱して、抱憂を抱くのである。

されど此兩日に限りて、暴風雨の厄あるに非ざるは勿論にして、此の兩日の間又は其前後に颱風と稱する、熱帶的低氣壓がフイリピン群島或はかム千ヤツプ島方面より發生し我邦に襲來して、暴威を逞ふする事があるからで其頃を警戒すべき時節なのである。

其の期日は例年八月末日か九月の初日に方り本年は九月一日になつて居る。是は言ふまでもなく立春から數へて、二百十日目を二百二十日目を二百二十日と謂ふのであつて、共に決定的のものである。

けれど天候は期節と相關々係はあれど、確定的のものではなく氣象の統計に依つて、判明するが如く颱風は早く六月の頃より發生し既に七月に於て、暴風雨の見舞を蒙て居る。然し八九月は最も頻繁に發生し殊ニ九月頃我邦を襲ふものは甚だ強暴にして、被害も大なれば一般に憂慮せられるのであるなれど、前述の如く其の當日のみ危險視するは當を得ぬのである、左に二百十日が如何なる理由で、暦本ニ登載せられたる、乎に就て次の如き傳說を紹介すれば。

眞享の初年（紀元二千三百四十四年頃）に暦學者安井春海が一日釣りに出掛るの心算にて、船を艤せんとせしに其時漁師の言ふに今日は立春から繰つて、恰度二百十日目に當る、私が五十年來の經驗した所では、二百十日或は二百廿日の頃は恰も暴風雨があつて今日も只今晴天ではあるが彼の雲行が怪しく、午後には屹度暴風になります。春海は老漁師の予言に半信半疑で是を中止して歸宅せしに、午後は果して暴風となつた。

依て春海は大に感ずる所あり、其れより毎年注意するに漁師の言葉が當りたれば是を幕府に上言して暦書に註することとせりと。

文他の一說は今より二百五六十年前に伊勢丸と云ふ船の船頭が多年の經驗上此の季節に暴風雨の起るより、推して一般庶民の心得となるに最も記憶し易きよう二百十日と言ふ日を定めて、時の政府に建白し容れられて暦本に登載せられたるものなりと。

フースヒー 水産と人物

小名濱町 比佐健造君

一見……君の印象……隆々たるの体軀顏容……寡言果斷豪毅……意志の人……果し細心の用意と豪放なる氣慨は船主として誂へ向き……先代の鮮魚商の主たりしを君は船主を主と逆轉させた適中適中立派に適中し滿々たるの富とポツポツたるの覇氣は大小名濱の中堅漁業家として次氏の漁業組合長撰出すべし、馬上氏は當主政二氏を援け内外共に第一線に立て快腕を奮へつゝあり、君は寡言である沈默の人である、計畫的の人であ

□ □ □

馬上喜一君

小名濱現時の青年漁業家より、次代の代表的人物を物色せしなれば本編の一對たる……比佐君と馬上君を商として、製造業として、鮮魚同業者の心膽を脅かしめるに充分である。

將に商港實現時日の問題次代の中軀を握り大小名濱を左右すべき君等……小名濱に眩惑せず廣く全世界に知認を求め益々奮鬪努力されん事を。

社告

相馬郡及び双葉郡へ支局開設

支局長募集す

但し在住者たる事

本人來談

磐城水産新報社

銘酒 清水正宗 清世界 釀造元 清水屋 小名濱（電話六番）

東洋捕鯨會社 小名濱町 小名濱事業場 場主 大野英之助

診療科目 内科、小兒科、婦人科、外科、耳鼻咽喉科、皮膚病、花柳病科、レントゲン科、 高久病院 磐城平町 電話五一三番

院長 醫學士 高久忠
副員長 新潟醫學士 赤羽清
藥局長 藥劑士 佐竹菊雄

和洋銅鐵金物問屋 ㊀釜屋商店 電話九番 一三九番

營業品目 發動機油類一式。麻網及。ベンキエナメル。麻糸漁網。ワニス滑車。ツキン類。發動器附屬品。其他船具一式 小名濱水産株式會社 支人配 平野直保

△外科一般△×光線科 上田外科醫院 平町南町（電一二九番）

外科 花柳病專門 木村外科醫院 平町立町（電三〇九番）

福島縣石城郡江名町 東京池貝鐵工所 東京日本鐵工所 特約代理店 中之作鐵工場 主 吉田正雄 電九番四一番